ⓒ *Heidegger-Forum* vol.8 2014

日本とドイツの原子力政策の存在史的解釈の試み

ティルマン・ボルシェ（ヒルデスハイム大学）

原子力の破滅が日本で起こる。――それにドイツが反応する。
何が起こったのか？　これをどう理解するべきか？

Ⅰ．福島に対するふたつの反応

もちろんこの違いはこうしたフレーズがいうほどラディカルではない。日本も反応している。しかし、日本はドイツとは顕著に異なる反応をしている。もう少し詳しく説明しよう。日本にとって「福島」は事故で、地震によって引き起こされた。福島で起こったことは確かに大事故だが、他のそれと同じような事故なのだ。地震の危険性は日本では日常的なことだ。地震は予告なく起こり、不可避だ。地震と津波の犠牲になった死者はとても大きな数にのぼる。これに対してそれらに続いて起こった原発事故では（今のところ！）誰も命を落としていない。事故の後は、その大小にかかわらず、被害を除去しなければならない。通常、その他のことは変わりない。類似の事故の危険を回避して被害の程度を減らすために事前の対策を講じることは、常に求められる。自動車事故がそうだ。もっと多くの安全装置（たとえばエアバッグ）を装備して自動車の性能を改善し、道路を改良して、交通規則を厳しくする――しかし車の運転は続ける。地震のような類いの事故は防げない。それは日本人が千年以上の歴史的経験を通じて知っていることだ。それにもかかわらず大地が揺れたところに住み続ける。だって、一体どこへ行けというのだ？　大地が揺れたからといって――そしてふたたび揺れるだろうからといって、日本を去ろうなどと思うひとは、ほとんどいない。原発事故でも同じだ。

被害を抑える対策について日本の政府と電力会社が提供している公式見解を英語で入手できる範囲で、あれこれ繰ってみた。たしかにいくつもの新しい委員会が発足し、長文の報告書を作成した。本当に実行された対策については、ましてや、それらの効果については、わずかしか知ることができない。それ以上に聞こえてくるのは、実際に流布している「風評」（reputational damage）を抑えようとする責任者たちの配慮だ。安心させようとする試み。しっかりと配慮の行き届いた言葉遣いだ。

外から見ていると、これらの公式の反応は次のような印象を与える。事故の被害を確認した。当初は度を超えるほど甚大な被害ではなかった。地震と津波による被害の方が原発事故による直接的な被害よりもずっと大きかった。だから、とおそらく結論づけられたのだろうが、原発事故も津波ほどひどいものではなかった。しかしながら、分かっているの

だ。原発事故に由来する被害の危険性は日増しに増大している。暫定的にタンクに貯蔵された汚染水は海に流出している。タンクは量的にも質的にも必要な期間にわたって汚染水を保管するのに十分ではない。放射能に汚染された水がもっと大量に大洋に流出することはあり得るだけでなく、そのための対策がすでに提案されているのだ。そうだとすれば、汚染水は海の植物や動物の食物連鎖に入り込み、その結果として、人間の食物連鎖にも入ってくる。最終的には世界中に、遠い将来にまでその影響が及ぶのだ。ある日本の学者が最近（ドイツのテレビの報道番組で）発言していた。2 年前に起こった原発事故の最大の危機はこれから来るのだと。同じ地域でさらなる地震の発生が想定されており、損壊した原発にさらなる損傷をもたらして、「全国の半分」が放射能に汚染されかねない。この学者によれば、そうなったら 3000 万人が直ちによそへ避難しなければならなくなるという――これは日本のような規模の国にとって想像を絶することだ。

ドイツでは当初からこうした結果の方に目を向けていた。それはこちらでドイツ人の「恐怖症」と呼ばれた。遠くから見ているドイツ人にとって、福島は事故ではなく、破滅だった。［ギリシア語の kata-strophee ――さまざまな秩序をひっくり返す出来事、「下方へ向け変える」すなわち、その対象が家族であれ、社会であれ、自然であれ、いつまでも爪痕を残すような破壊をするということ］破滅は修復し得ない被害をもたらす。1986 年のチェルノブイリ原発事故のとき、驚くばかりで情報がほとんど伝わらなかったドイツで、世論はそれをまだ原発「事故」として受けとめていた。人為的ミスと無能と腐敗が原因とされたのだ。しかし、この事故は数十年かかったが、ともかく制御されるようになった。これに対して福島についての受けとめ方は違っていた。まさに破滅と考えたのだ。この（政治的党派を超えた）集団的感情こそが、ドイツでは福島の出来事に対する反応を決定していた。この感情はとても強かったので、ラディカルな政策転換が不可避となった。原子力政策の枠内での転換ではなく、エネルギー政策の転換だった。求められたのは、安全措置を手厚くするといった原発の改良ではなかった。日本もドイツも最高水準の安全措置を施した世界一優れた原発をもっていたと確信していたからだ。求められたのは、原子力に依存しないエネルギー政策で、原発は将来のエネルギー供給の構想からは外された。徹底的に、完全に、そしてできるだけ速やかに。「脱原発」が決断されたとき、そのために必要なコストが明らかではなかったし、現在でもそうだ。それは有無を言わさぬ決断で、無条件だった。議論の余地が残っているのは、それを実現する方法だけだ。脱原発のやり方についてだけが今日まで問題となっている。それは技術的に複雑で、経済的には計算が困難、そのため政治的にも激しい論争が続いている。さらに、それは現在と未来のエネルギー政策におけるたくさんの問題のうちのひとつにすぎない。これからのエネルギー政策は――これについてもはや議論の余地はない――原子力抜きで済ませねばならないし、だからこそ原子力抜きで済ませるはずだ。驚いた私たちは、突然、ごく最近まで全く非現実的とされてきた多くのことが考えられ得るし、また実現可能だということを知った。後知恵ながら、原発ロビーと一部の政治家たちが以前に主張していたいわゆるやむを得ない事情が、実は利害関係に基づいていたのだと分かった。必然性があれば、そして従来と異なる事の進め方をすると決断すれば、急に、事態は違った動きになる。

Ⅱ．技術の本質

ハイデガーを読むことは、福島に対する反応についての日独の違いを理解するうえで、私たちの役に立つのだろうか？　今は時間の関係で、1955 年の有名な講演「技術への問い」[1]に焦点を絞りたい。ここでハイデガーは、ある本質的な（すなわち「本質の」）違いに注意を喚起する。それは、芸術と職人芸（téchnee または ars）による制作と近代的技術による工業生産との間にある違いだ。

「技術」はもともと、できるという意味での知、すなわち制作に結びついた知（アリストテレス『ニコマコス倫理学』E 1040a ／「ノウ・ハウ」）を、「巧みに」制作する個々の人間の能力と熟練を指していた。というわけで、それは常に特定の目的のための手段、そのために人間が有する手段だった。それは道具的性格を、決まった目的に役立つ機能をもっていた。この意味でハイデガーは技術を「探り出す（entbergen）」やり方と理解していした。「探り出す」とは、ギリシア語の動詞 aleetheúein（真なることを考える／言う――アリストテレスの造語）にハイデガーがあてた訳語だ。技術は生活に直接必要な手段を生産することで、行動の新しい可能性を拓く。クザーヌスの有名なスプーンだけでなく、私たちが毎日使う箸もこの形式（téchnee/ars）の産物だが、それには武器や文芸も入る。この近代以前の技術は、ポリスという全体を見渡すことが可能でお互いに誰が何をしているかが分かる社会形式の生活世界に組み込まれていた。

文化史的に見ると、技術は初めから社会的分業の産物だった。芸術家も職人も技術者も一緒に暮らす市民仲間から必要なものを与えられて、自分たちの特別な仕事に集中できるのだ。計画を立て、作業工程を分析し、必要な材料を調達し、自分の仕事がほかのこととそれ以上にどう関連しているかについては意に介さないようにする。作業場に、後の時代には実験室に引きこもる。――ここまでならまだいい。ところが人間はますます細分化された目的のためにさらに良い手段を望むので、分業を超えて生産過程はますます複雑になってゆく。ここで、単純で機械的な巧みの術から近代的技術に至るまでの発展史をなぞる必要はない。その結果はよく知られている。時とともに手段が目的化する。技術的生産がひとり歩きして独自の形式を形成する。技術的生産が人間を――生産者（職人、芸術家、技術者）と消費者の両方を――どんどん使役するようになり、本来は主人であるべき人間を道具化する。私たちすべてを道具化する。

具体的にイメージしやすい例を示そう。技術に対応した発展が経済にも見られるのだ。当初の関心は必要なものと消費材に向けられ、それらを自分で生産できない人びとは交換によって手に入れようとする。やがて関心の矛先はこの交換の手段に、つまり貨幣に向けられるようになる。ところが貨幣となると、もはや消費できないのだ。貨幣は明らかに純粋な手段なのに、究極の目的として求められることになる。技術（職人芸／芸術）についても同様だ。必需品や消費財を生産するための手段への関心は、生産手段そのもの、つまり機械に対する関心へと移行する。技術についても経済についても、いずれも消費の可能

[1] Martin Heidegger: „Die Frage nach der Technik“, in: *Die Technik und die Kehre*, opuscula 1, Stuttgart 1962 ([9]1996), 5-36. このテクストからの引用箇所は、丸カッコ（　）内に頁数を記して示す。

性を拓くべき手段が（自己）目的となり、それが**不特定の**さらなる目的設定をいっぱい産み出し、見通しがきかないほどになる。

この傾向をさらに強める連鎖がある。自己目的化した目的のための手段が、それを用いる人びとの手に渡ると、内に対しても外に対しても常に権力の手段となる。だから、武器の発展と生産もまた、技術の一般的な発展を決定してきたのだ。武器の「進歩」は留まるところを知らない。どんな支配者も、どんな国民もこの力学の圧力から逃れられない。遅れをとるものは、遅かれ早かれ没落する。

ここを出発点として、ハイデガーは近代的技術の本質に関する思索を進める。技術は、自己目的だと思われ、あるいはそのようなものとして追求され、推進され、支援されるとともに要請され、個々の人間に仕える手段から人類全体に対する挑戦（Herausfordern）へと変異する。というのも、近代的技術の産物に基づく内在的権力志向のゆえに、技術という知の特殊な形式のみが知の真なる形式だと思われてしまうのだ。こうして技術の道具的地平の枠が破られる。技術は無制限となり、それ以外の知の形式をすべて飲み込んでしまうことになる。ハイデガーの言葉でいえば、技術はもともとある特殊な「探り出すやり方」（12f.）[2]にすぎず、ほかにもさまざまなやり方が可能だったのに、いまや探り出す（真理を考え、そして真理を語る）唯一のやり方だと思われ、事物の本性についての、また人間の本性についての真理に至る唯一の道だとされるようになる。どうしてかというと、人間までもが、もっと精確にいえば、人間自身の人間観が医学的技術の求めるところに**自分から**従っているためなのだ。飛行機が飛ぶという事実をわれわれは、この目的のために推進されてきた物理学が真理であることの決定的証明とみなす。（同様のことは医学についてもいえる。）飛行機がときどき墜落するという事実は例外とみなされ、偶然とみなされ、残念な人為的ミスだとされる。しかし、それが理論の真理性を揺るがすわけではない。このようにハイデガーは世界に対する**われわれの**――つまり現代のわれわれを支配している――見方を診断している。世界を理論的に見るのは、「近代的」（技術の観点による）自然科学の見方で、それは（われわれ自身を含む）自然全体を計算可能な力学的連関として提示する。ハイデガーは世界をこのように理論的に捉えることの実践的次元をさらに強調して、こう述べている。技術の枠を破った精神に基づく近代的自然科学の見方は「計算可能な力学的連関としての**自然を追いかけている**（*der Natur nachstellen*）」（強調筆者）。自然は道具的理性という裁判官の前に召喚される。自然は「現存物（Bestand）」として、すなわち対象の総体として知覚されるが、それは「みずからを計算で確かめられるように告知してくるのであり、情報の体系としていつでも呼び出せる状態にある」（22）。「現存物」としての自然はもはや神から与えられた恵みではない。われわれは、それを神の恵みとして保護するべく付託されているのに、自然に対するこのような扱い方は発掘（Entbergung）（すなわち技術の精神に基づく知の近代的形式）であり、むしろ「自然に対してエネルギーの提供を強要する挑戦」（14）である。

[2] 「生産（Her-vor-bringen）はすべて探り出すことに基づいている」（12）。技術とはものを生産することだが、ものは自然に（おのずから生じるという意味での phýsis）もたらされるのではなく、芸術家あるいは職人といった「他者」によってもたらされる（11）。

ハイデガーによれば、技術の本質は**われわれの**思考を規定している。「技術」は西欧文化の定め（Geschick）であり、われわれが探り出す（つまり、真理を考える、真理を語る、そして真理を実行する）やり方として、われわれの生活形式全体にわたる近代的技術の発展を支配してきたというのだ。「定め」を私は「伝統の力」と翻訳したいが、それには立ち入った説明が必要かもしれない。**探り出す**（「真理を考える」）とはそもそも、ハイデガーによれば、人間の特徴（「発掘の定めが人間を常に支配している」（24））ではある。**そうであっても**、探り出すことは人間の本質をなすわけではない。この区別が転換をもたらす。転回の可能性を拓く。自然に対する西欧の技術的見方は、すなわちわれわれの定めとしての「枠組み（Gestell）」は、「強制を伴う宿命ではない。というのも、人間が自由になるのはまさに、定め（すなわち伝統）に帰属していながら、聴く耳をもつ限りにおいてであって、定めに絶対服従するからではない」（24）。ハイデガーからわれわれが学べるのは、敏感な耳をもつことだ。技術がその枠を破ってほかのすべての領域を支配する生活形式になるところに潜む危険に対して敏感な耳を持つこと。探り出すこと（真理の過程）は同時に自由の場所でもある。「探り出すことはすべて自由なところに由来し、自由なところに入って行き、自由なところに連れて行く」（25）。このようにしてわれわれは自由を知覚できるのであり、それは探り出す別のやり方を発見、または再発見する自由なのだ。この論文に限らず、ハイデガーが次のように提案していることは有名だ。つまり、技術の源泉が芸術に、とりわけ詩に、狭い意味での poíeesis にあることをあらためてよく考えるように推奨しているのだ。そうすることで、あの深淵が見えてくる。その崖っぷちにわれわれを導いたのが、みずからの枠を破った掘り出し方としての技術なのだが、そうするとまた出口も見えてくる。ここでハイデガーは詩人に語らせる。「危険のあるところ／救いもまた生まれる」（28）[3]。

ここで原子力技術の問題にもどろう。芸術家であれ、職人であれ、技術者であれ、その産物を引き取る人びとの集団に根を下ろしている限り、自分の利益のためにも全体を見失ってはならない。全体を見渡せる市場で活動する商人についても同じだ。量が違いを生む。「グローバル」な生産過程と「グローバル」な市場になると、生産者は自分の活動の結果まで見届けられない。俯瞰できなくなり、全体が見えなくなる。

このことはグローバルな（もっと精確にいえば、もはや全体を見渡せない）生産過程あるいは市場だけでなく、進歩し続ける技術にも内在しているといえる。思考のこの状況にとって典型的な意味をもっているのが、原子力技術であるようにわれわれには思える。（1）分析し分断する科学技術者の眼は次のように問う。いかに原子核に蓄えられたエネルギーを見つけて抽出するか、いかにそれを適量でたとえば電気に変換するか？　（2）これ以外の問いを科学技術者は意に介さない。核廃棄物の最終処分すらも問題ではない。事故の可能性や自分が作った製品が悪用される可能性も、同じく問題にならない。これらは他人ごとだ。こうした類いの専門的意識の集中は技術によって強制された分業の結果だ。だれもが全生産過程のうち自分の担当部分についてだけしか責任をもたない。この担当部分はま

[3] Friedrich Hölderlin, *Patmos*, V.3f.

すます小さくなり、全体を見渡す眼が、起こりうる結果に対する注意が、失われてゆく。

進歩とともに可能性はますます広がる（potentia, potestas）。力は量りがたいところまで増大する。古代ギリシア人たちは、度の過ぎた力について、単純な神話のかたちで伝えている。自分の触れたものがすべて黄金になるという能力を手に入れたミダス王は、一夜にして金持ちとなり、幸福になった。ところが、この幸福の結果ゆえに王は飢えねばならず、水も飲めなかった。というのも、王は自分の生活の基盤を破壊してしまったのだ。王はパンと水を黄金に変えることで、パンは食べられず、水も飲めなくなった。節度が失われたのだ。バランスが、均衡が、秩序（kósmos）が破壊されたのだ。

この神話に照らしてドイツの世論は福島のメルトダウンを見ていた。原発の事故は自動車の事故ではない。それは津波がもたらす被害とも比べものにならない。どんな事故でも被害は限定的だ。それはどんなに大きくても、当事者にとってどんなに痛手であっても、空間的にも時間的にも限定されている。原発事故は違う。その空間的そして時間的広がりは予見できない。それは起こった後も拡大し続ける。被害は福島で始まったが、大洋を超えて地球の環境システム全体に及ぶ危険がある。

「危険のあるところ／救いもまた生まれる」とハイデガーは詩人に語らせている。救済は考え方を変えることからのみ期待できる。これこそハイデガーが芸術をもって語りかけていることだ。芸術は真理を考え、真理を語るやり方のひとつだ。芸術は、これまで行ったことのない道を進めと命じる。それは、遊ぶことによって思考の自由を示す。――破滅の経験は、われわれに従来と違った考え方をするように要求する。「われわれに何ができるか？」（たとえば、もっと安全な原発をつくれるか？）という問いは「われわれは何を欲するか？」という別の問いに移行する。ものを技術的に見ることは誤りではない。しかし、それだけが真理なのではない。というのは、それがものを見る唯一の可能性ではないからだ。技術は本質的に新しいリスクの発生をともなう。技術的改良によってわれわれはリスクを小さくすることはできるが、それを完全に排除することは決してできない。そんなことは技術者ですら主張しない。それに、新しい可能性は何であれ、良いことと悪いことの両方に利用され得る。だから今、この問いがあらたに違うかたちで発せられるのだ。それはもはや技術的可能性への問いではなく、どうしても残ってしまうリスクへの問いだ。特定の技術の恩恵を享受できるようになるために、われわれはどんなリスクを冒す用意があるのか？

最後の章では、責任に関するいくつかの問題に触れておきたい。――誰の、誰に対する、何に対する責任か？　これらの問いに答えはもちろんない。

Ⅲ.（責任）

ドイツ――［ドイツでは過去に 2 度ほど政治的破滅から有益な結果を引き出す必要を見て取り、それを受け入れたことがある。――**考え方を変え**、**諦める**ことによって。それは 1806 年（から 1815 年まで）と 1945 年（から今日まで）のことだ。この歴史的経験に基づ

いて私は、あえて歴史的責任への問いを提起しようと思う。］

早い時期にハイデガーは当時の技術が歯止めなく全世界的に進展することに潜む危険を認識していた。ところが、原子力のもたらす多大な恩恵に対して世論は大感激していた。――ハイデガーほかの人びとの警告の声にもかかわらず。それからチェルノブイリが来た。ドイツにとってはいわば玄関先での出来事だった。このときはまだ、この出来事を事故と解釈することに成功した。事故は「あそこで」（ソ連で）は想定され得たが、「われわれのところでは」決して起こり得ないというのだった。このようにして権威筋はわれわれを安心させようとした。世論はそれを信じて、大多数は元の日常生活に戻っていった。しかし今、福島が続いたのだ。26 年経って、しかも日本で、この最高水準の技術を擁する国で！　今度こそ、ハイデガーの警告が一気に浸透したのだ。しかも下から。権威筋の言うことは変わらなかったが、その安全だという保証や安心させようとする試みは、もはや信頼を失っていた。民主的政府はこの新しい雰囲気を受けとめざるを得なかった。あるいは権威筋を支持し続けるならば、その勢力はまもなく権力を失うだろうと想定された。

日本――ここでは深く伝統に根ざした強固な権威信仰が今日まで支配していたし、支配している。その存在史的優位はごく最近まで途切れることなく続いてきた。権威への信頼は、私の見方が正しければ、1945 年の敗戦においても生き延びた。というのも、この破滅は外からこの国に進入したのだ。福島の事故でも当初、この信頼は全く揺るがなかった。――これこそが外国で見ていた多くの人びとにとってたいへんな驚きだった。後になってだんだんとためらいがちに経済的利害と腐敗が、無能と嘘が暴露されてやっと、多くの日本人たちにとっても、明らかにお上への信頼（権威信仰）が深刻に揺らぐようになった。この間に不信感が公にもなった。ここでしかし、持続的な考え方の変化が始まるかどうかは、将来が明らかにしてくれるだろう。

最後に責任について話しておきたいと思った。**誰が、誰に対して、誰のために**、そして**何に対して**責任をもっているのか？　ところがすぐに分かったのは、これが全く新しい包括的な、きわめて難しい問題で、私が今日ここで論じることはできないということだ。

これを論じる代わりに、思い出してもらいたいことがある。それに対して、私は感謝と敬意を抱いている。それとは、まだヨーロッパの技術の精神が浸透する以前の、ましてや支配的になる以前の日本における古来の伝統のなかに、近代的技術とは別の思考モデルが見出せることを、今日のわれわれが体験しているという事実だ。この日本の伝統こそ――私も含めて――多くのヨーロッパ人が日本に来て、思考の別の源泉をみずから発見し、そこから学ぼうとする理由なのだ。古来の日本の思考と生活の形式を振り返って考え直すことが、今日の日本の原子力政策を根本的に問うにあたっても、（原子力）技術の祝福をみんなで盲目的に信頼することに対して批判的に見つめ直す貴重なきっかけとなるかもしれない。自然とその四季のリズムに対する神道的な畏怖の念、無我の境地ですべての人間に対して共感する仏教的倫理、そして社会と自然において相争う力の均衡を宇宙の秩序に求める（ハイデガーのいう「世界の四極構造（Geviert）」に似た）儒教的秩序の思想――このようにちょっと暗示しただけでも、豊かな活きた伝統の宝庫が彷彿と浮かび上がってくる。この伝統を前にして、一面的に経済的国益にのみとらわれた原子力政策を続ける余地

は、もはやない。

しかし、これら古来の思考と生活の形式を示唆しても、次の反問に答えることにはならない。放棄に基づく政策に成功する可能性はあるのか、あるいは、武器の歴史の力学が具体的に教えているように、強さに基づく政策だけが成功するのか？　これについての短い個人的な言葉で私のスピーチの締め括りとしたい。われわれの国家が**外交政策**を展開する限り、どうしてもトマス・ホッブズの人間観と歴史観に従わざるを得ない。主権国家間には最終的に強者の正義しか通用しないということをホッブズは確認しているのだ。そのような状況は、国家間の外交政策が多数の人間の意識の中で**国際社会の内政**へと転換するとき――それは統一国家をつくることなく、文化を画一化することなく、生活形式をグローバル化することなく構想されるべきであり、また実現可能であるべきだ――初めて変わるのだ。これはまさに、他の民族や国家の関心に違和感を抱いても、その正当性を承認して、それを本気で受けとめる用意のある政策のはずだ。そうしたことは、（国家の）利己心を最大限まで放棄することなくして、不可能なのだ。

訳　高橋 輝暁（獨協大学）

Tilman BORSCHE

Ein seinsgeschichtlicher Deutungsversuch der Atompolitik Japans und Deutschlands

編者注記

本稿は、ハイデガー・フォーラム年次大会（2013 年 9 月 21 日、於関西大学）の特別プログラムとして行われたティルマン・ボルシェ教授の講演の邦訳である。当日は、訳者の高橋輝暁先生が司会進行と通訳を務めて下さった。その後、ボルシェ教授と高橋教授の許可を得て、高橋教授によるご高訳をジャーナルに掲載させていただくこととし、訳文の再検討と、とりわけハイデガー固有のいくつかの術語について一般に用いられている訳語への変更およびその注記作業とを進めていただいていたのだが、教授のご病気により、期限内に仕上げることが困難となった。編者としては、該当箇所の訳語の変更を試みようと思ったが、高橋教授のご高訳は、読んでいただければわかるように、日本語としてきわめてわかりやすく仕上げられている。この文章に対し特定の箇所のみ一般的な訳語に変更することは、その独特のリズムを壊すように思われた。そこで、ご高訳には一切手を加えず、情報として最低限必要と思われる術語のみ、編者の側でドイツ語原語を挿入させていただいた。

高橋教授に最後まで作業していただけなかったことは返す返す残念であるが、大会当日には大変なご尽力を、そしてその後は本稿のことに種々のご高配をたまわり、またこのような形で掲載することをお許し下さった同教授には、この場をお借りして厚くお礼申し上げたい。